

先達

結城哲彦さんを送る言葉を述べる前に、まず私の父のことを書かして貰いたい。

私の父は 65 歳の定年まで裁判官として勤務し、その後 73 歳まで大学教授として研究と教育に従事していた。大学教授を退職する際には、書斎にあった大量の法律書をすべて処分し、これからは趣味の語学の勉強に専念すると楽しそうに語った。父は、仕事の傍らに日米独仏伊語のほかマジャー語まで習得しており、これからは中国語の習得に専念するとのことであったが、私から見ると、仕事を離れ、趣味のみに生きがいを見いだそうとした頃に病を得て、その後は 80 歳で亡くなるまで、澁刺として過ごしていたという記憶は私にはない。人は両親や長兄姉など人生の先を歩んでいる人の姿を見て、自分もそのような人生が送れるのは当然だと思って過ごしている節がある。だから私は 73 歳くらいまでは元気に仕事に専念している自分の姿は思い浮かぶが、その先の人生のはっきりした輪郭を描けなかった。

結城哲彦さんが早稲田大学大学院法学研究科に科目履修生として来たのは 74 歳のときであった。企業での仕事を定年退職後に大学に来る方の中には、カルチャーセンターでの趣味といった意識の方もおり、私も最初は結城さんもそのような方なのかと軽く受け流そうとしていたが、学生時代からの夢であった学問の道にこれから進み、80 歳までには是非法学博士号を取得したいと述べ、述べるだけでなく若い院生以上に研究に没頭していた。それも研究は極めて楽しそうであったし、そのほかに若い院生や特に留学生に対しては懇切丁寧に研究のアドバイスや日本語の指導してくれた。教室に入れば、その風貌からして誰もが結城さんが指導教授であると思っただろうし、私もよき補助者ができたと安心して院生の指導を委ねることができ、大助かりであった。留学生の論文指導には大変な苦勞があったようで、「これ以上指導したら結城論文になってしまいますので」と述べ、最終的な所は本人の努力に期待するといった、指導の鏡ともいべき指導をしてくれ、おかげで無事学位を取得できた院生も多い。予定どおり 80 歳になる前に法学博士号を取得し、その後も私の授業には必ず出席してくれ、若い院生の指導にも以前と同様に当たってくれたし、懇親会にも率先して出席して、若い者たちと長時間立ったままで語りあい、元気一杯であり続けていた。6 月 17 日月曜の授業でも、日本語が不十分な発表をした院生に対する指導を結城さんをお願いしたところ、いつもと同様に、お任せくださいと頷いてくれた。

74 歳から 84 歳まで結城哲彦さんはいつも私のすぐ隣にいたと思っている。研究に対する旺盛な意欲と、人に対する尽きない親切心それに親から承継しただろう元気の DNA を携えた結城さんは、66 歳になってしまった私にとって、これからの私の人生の過ごし方を示してくれる先達であり、あのように人生を過ごせたらよいと思えるロールモデルであり、あり続ける。